

今月の滝

白糸の滝



細江久美子 (撮影・文)

軽井沢の景勝地のひとつである白糸の滝。無数の滝が白糸のように流れ落ちる様から、その名前が付けられました。

川のせせらぎ、野鳥のさえずり、浅間石の石積み、石に生えた苔、川沿いのシダ植物、可憐な草花、、滝へのアプローチにも癒しの要素がたっぷり。

高さ 3m、幅 70m の小さな滝ですが、訪れる方を魅了しています。

今月の詩

ゆあさとしお (選・文)

久しぶりに小津安二郎の『東京物語』と『麦秋』(デジタル修復版)を見た。映画はさり気ない日常の繰り返しの中で、ほんの少しずつ変わっていく世界のあり様の美しさと残酷さを描き出す。小津は「何でも無いものも二度と現れない故にこの世のものは限りなく貴い」とメモしている。

改めて、小津映画の行間に読みとれる家族間の情愛の交換に感銘を受けた。なんという濃密な時間が流れていることか。同時に、映画が作られた1940~50年代には、それはすでに失われたものであったことに気がついた。

家族という最小の共同体の中に、かつてあったかもしれない、しみじみとした情感のありようとはかなさ。小津映画はそのテーマの普遍性と独創的な映像美学のゆえに、国境を越えて多くの映画監督の尊敬を集めてきたのである。

さて、「おうち」という詩作品。子どもの視点から書かれているこの詩は、小津映画の一コマのようだ。子どもの安全基地としての「おうち」。それはすでに思い出の中にしか存在しないのかもしれない。

新川和江: 1929 年生まれの詩人。茨城県結城市出身。詩集『睡り椅子』。さまざまな愛の姿を表現する。

おうち

新川和江

ただいま とかえってゆくと
おかえりなさい って
やさしい声が きこえるところ

ストーブがもえていて
おなべの中で
シチューがことごと にえているところ

おてあらいがあって
おふろがあって
へいきで はだかになれるところ

おし入れがあって
たんすがあって
わたしが お宮まいりにきたきものなどが
いまでもだいに しまわれているところ

夜ねむると おかあさんが
(ときどきは おとうさんもね)
おやすみ いいゆめをごらん と
おふとんをなおしに きてくださるところ

『おばさんから子どもたちへ
贈る詩の花束』より

外国ルーツの子どもたちの困難 ～公立小学校の日本語教室から～

萩原裕美（船橋市立葛飾小学校教諭）

1 はじめに

グローバル化が進む中で、ある日、教室に突然、全く日本語のわからない子どもが編入してくることが続いている。言葉以外にも、それぞれの子どもたちには複雑な背景や個性があり、問題は様ではない。以下は、これまでに会った外国ルーツの子どもたち及び公立小学校内における日本語教室に校内通級する子どもたちの困難についてまとめたものである。

2 外国ルーツの子どもたちの困難と課題

全く日本語がわからない状態で編入してきた子どもたちは、それぞれの発達段階や母語、成育歴などにより、色々な困難と向き合うことになる。学年別の事例を下記する。（事例には本質を損なわない程度に加工を施し、児童の在籍校は伏せている。）

（1）小学校低学年のAさんの困難と課題

〈入学当初の様子〉

Aさんの日本語は、小学校に1年生として初めて入学する半年くらい前に中国から来日して、保育園で身に付けた指示語程度であった。日本語がわかる1年生ですら、45分間ずつ、座っているのは苦手な子どもたちが多い中、担任の先生の言葉もほとんどわからず、ふらっと立ち歩いてしまう。日本語指導担当者や日本語指導協力員、支援員なども時間に限りがあり、ずっとAさんだけに付きそうとはできない。入学当初、毎日1～2時間の学習で下校するまでの間、Aさんは何をしていたのか、わからないまま過ごしていたと思われる。

〈毎日、5時間目まで・・・〉

4月後半、給食開始され、午後まで授業があるようになると、立ち歩くことが多くなり、担任が穏やかに着席を促してもふらふらすることが続いた。そして、「使わないなら椅子はいらなくていいですね。」と言われて初めて、時間内は座っていないといけなくて、と体得したようであった。その後は、「椅子、いらなくていい？」と声をかけるだけで席に戻れるようになった。座っていても、日本語がよくわからない状態は変わらない。しかし、座ってられるようになって半年過ぎるころまでには、教室でよく使われる言葉を覚え、授業に参加できる時間が増えていった。

〈Aさんの今後の課題〉

保護者が多忙で日本語が苦手であることから、必要な学習用具が揃わず、Aさんは、自分だけ図工に必要な材料が無いことなどを心配する日が続いている。日本語指導教室でも、担任と連携し、事前に保護者によくお願いするとともに、Aさんが必要な物を持ってこられそうにないときは、ボタンやリボンなど、事前に用意して支援している。

母語話者の日本語協力員の方によると、中国語もあまり正しく身に付いていないことがわかった。保護者が多忙であることから、入学前、半年余りを日本語のみの保育園で過ごしていたためかと思われる。どちらの言語も語彙が限られ、思いを十分には表現できない。その後、1年生の終わり頃には、日本語の発音に課題が残るものの、五十音表を手掛かりに平仮名は読めるようになり、中国語は、保護者が家庭で教え始めたところ、日本語の理解力も伸びてきた。

Aさんは日本国籍であり、これからも日本で生活していくとのことである。今後、学習用語の不足から、学力の格差が開いてしまうことが懸念される。継続して日本語の基礎が身に付けるための支援が必要である。また、母語として身に付けた中国語と文化は、現在の学校教育では、その保持は保護者に託されている。教室でできる支援としては、Aさんが、両方の言語と文化を自由に行き来できる自分を自覚し、活躍できる場の設定が必要と思われる。

(2) 小学校中学年のBさんの困難と課題

〈入学時の面談と給食〉

Bさんは、インドネシア国籍でイスラム教徒であることから、特に給食について、1年生として入学する時に両親と面談し、確認を行った。保護者は日本語が不自由なので、イラストとジェスチャーを交えて、給食の調理場の人員や時間制限などから、完全な代替食を用意することはできないことや、だし汁にも豚肉由来の調味料を使う可能性があることなどを説明した。

両親は多忙のため毎日お弁当を用意するのは難しいので、Bさんが自分で見てわかるものだけ除去することになった。宗派にもよるとは思われるが、まだ小さい子どもたちは、“お試し期間”であることから、あまり厳格にしなくても大丈夫とのことであった。給食が始まってからのBさんは、おかずは食べられない日も、ごはんデザートなど、食べられるものを選んで、皆と楽しそうに過ごす様子がみられた。

〈8歳を過ぎて〉

Bさんは、中学年になると、スカーフを身に付けてくる日が多くなった。学校では、スカーフをつけたり、つけなかったりしていた。自分なりの判断基準があるようであった。担任の先生の配慮もあり、教室では、当たり前の風景になっていた。帰りがけに「あれ、スカーフは？」と言われて、「あ、忘れた。」と、身に付けて帰ることもあった。

そして、今までは毎日、食べられないものだけ除けて普通に食べていた給食について、保護者から「ラマダン中なので食べられません。」という連絡があった。8歳を過ぎて、“お試し期間”からの移行期間に入ったとのことである。給食時間中、周りが食べているのを見るのは気の毒だし、朝から飲まず食わず、ということで、熱中症も懸念され、午後も学校に残るのは大変ではないか、と伝えると、日の出前、4時くらいまでいっぱい食べたり飲んだりしているので、いつも通りで大丈夫、給食中は教室で、本など読ませておいてください、とのことであった。

とはいえ、体調は心配であり、担任と、複数の教員で見守ることとした。給食中は、自席で静かに本を読んでいる。1日に何回か「大丈夫？」と声をかけると、Bさんは笑顔でうなずき、いつもと変わりなく過ごす様子が見られた。

〈ラマダン中の水泳学習～保護者の心配～〉

その後、「ラマダン中の水泳では、シャワーの時から一滴も水が口に入らないように、ずっと見守っていて欲しい」と保護者から要望があった。この件についても面談し、教員が一人にずっと付き添っていることはできないこと、また、そのようにして目の前にいたとしても、水がうっかり口に入るのを防ぐことは不可能であることを伝えた。しかも、飲まず食わずの状態の水泳の授業に参加させるのは危険なので、見学を勧めた。

しかし、保護者は、「見ていてくれればいいのに」と、納得できない様子であった。そこで、保護者が一番心配していることを伺ってみると、「体育の成績が心配」とのことであった。Bさんはラマダン前に既に水泳の授業に参加しているし、体育の成績は、水泳だけで決まるものではないこと、見学も勉強のうちなので、成績が下がる心配はいらぬことなどを伝えると、保護者も笑顔になり、ラマダン中の体育は見学する、と納得してくださった。

〈Bさんの今後の課題〉

Bさんは、幼稚園から日本で過ごし、中学年になるまでに、保護者より日本語が堪能になっていたため、保護者は「日本語指導は必要ない」と考えている。簡単な通訳は、すべてBさんが行っている状態だが、学校からの連絡など、保護者にうまく伝えられず、泣きながら電話してくることもある。今後、特に抽象的な概念や、初めて学ぶ学習について、学習が難しい、と感じるようになったら、日本語指導の通級を検討するよう伝えている。

4年生になって弟が生まれたことから、家庭の手伝いや、通訳代わりに病院に付き添うためという理由で欠席が増えてきた。女の子が母親の手伝いをするのは、Bさんの家族の文化でもあるが、既に学習の遅れが生じ始めている。学校としては、学習の機会を保障することの大切さを伝え続け、本人の本来の能力を最大限発揮できるよう支援していく必要がある。

(3) 小学校高学年のCさんの困難と課題

<同じ“学校”なのに>

高学年で初めて中国から日本に来日したCさんは、保護者の都合による突然の編入で、日本語は全くわからない。受け入れる担任も中国語は話せない。編入した初日、机に突っ伏したまま、ずっと涙していた。机の下は、あっという間に涙の海になった。隣のクラスの、中国語を話せる子どもに、心配しないよう通訳してもらったり、母語話者の支援者と電話を繋ぎ、安心するよう伝えたりしたが、翌朝、登校していない。電話すると、登校を渋っているとのことだった。初めが肝心、と、とにかく、保護者にCさんを連れてきていただいた。何とか登校できたものの、その後の学校生活全て、初めてのことの連続だったようだ。下記のような日本の学校の日常が、「今までと違う」という思いが強く、辛いのは、高学年ならではの困難である。

- ・着替え（今までは体育でも、着替えたことがない。トイレに籠って着替えていた。）
- ・音楽（音楽の授業はなかったとのことで、教室移動をとてつもなく嫌がる。教室の出口と、たまたま隣だった音楽室の入り口の柱にしがみついて動こうとしなかった。）
- ・家庭科（これも前の学校で経験がない科目で、調理実習は、「自分は家でご飯を作ることがあるし、できるから必要ない。」と教室を出てしまう。）
- ・掃除当番（他の子どもたちが身振り手振りで教えても、固まったままやろうとしなかった。）
- ・尿検査（ジェスチャー交じりに説明して、説明書を母語に翻訳したものを持たせても、予備日にも検体を持ってこられない。やむを得ず、学校で実施した。）
- ・席替え（懲罰的な場合を除いて席替えの経験がなかったとのことで、「席替え、いらぬ。」と教室を飛び出してしまった。保護者も、席替えやクラス替えに非常に驚いていた。）

<少し慣れたけれど>

編入後半年以上経過し、日本語が少しずつわかるようになっても、初めての経験が続く中で、緊張や言葉の誤解によるトラブルが続く。Cさんが一番苦手としていたのは、何か失敗したときに謝ることであった。目の前で花瓶を落として割っても「やってない」と言う。母語話者の説得と日本語の練習を重ねて、「ごめんなさい、わざとじゃないけれど」というように言い換えられるようにしていった。「本当の友達が欲しい」と、時に涙するようにもなった。

<やはり日本語・・・>

ある日、Cさんは、「ばかって言われた。」と担任に伝えた。驚いた担任が周りの子どもたちに事情を尋ねたところ、「ぼくたちは、ばかなんて言っていない！」とトラブルになった。日本語教室でイラストも描きながら事情を聴いたところ、Cさんは、自分がある友達に『『ばか』と言ってしまった』ことを謝りたかったと判明した。自分から初めて謝ろうとしたのに、受動態の使い分けができていないことによる誤解を招いてしまった事例である。

しかし、これをきっかけに、周囲の子どもたちにも、Cさんには日本語を含め、まだわからないことが多いことや、友達が欲しいと思っていることが伝わった。Cさんも、日本語をもっとがんばらなくては、と自覚していた。1年を経過する頃には平仮名を覚え、ふりがなを振れば教科書を自分で読めるまでになった。

<Cさんの今後の課題>

編入当初に状況を教育委員会に報告し、母語話者の支援員が早めに派遣されたこともあり、生活面は、間もなく馴染み、半年後には、後から来た編入生に、掃除の仕方を中国語で教えるまでになっていた。しかし、いつか中国に帰ると聞かされて来日していたことから、半年ほどは平仮名すらきちんと覚えようとしなかったため、学習面ではその後も困難を極めている。しかも、中国語は、聞いてわかり話せるものの、どんどん忘れて書けなくなっている。

Cさんは日本国籍を取得し、今後日本で過ごす予定とのことだが、保護者は多忙のため、中国語の読み書きを教えることができない。Cさんは来日後1年で、保護者よりは日本語がわかるようになったが、この状態では、どちらの言語も不自由で本来の力が発揮できず、中学校でも、教科書の内容を理解できないことが懸念される。日本語の日常会話が可能になっても、文化としての中国語の学び直しと、学習用語としての日本語習得のための支援が必要となる。

3 4つの適応期と困難

全く日本語がわからない状態で編入してきた上記3人の子どもたちは、それぞれ、①入学／編入当初の混乱期（ドキドキ期）、②2～3か月して少し慣れてきたころの暫定適応期（わくわく期）を経験した後、③半年以上過ぎて日本語が少しわかるようになり、特別扱いされなくなつてからの適応退行期（ももん期）を担当の支援も受けつつ乗り越え、1年を経過するころには、④自立適応期（のびのび期）を経て、自分らしさを発揮していく様子が見られた。

子どもたちは、皆それぞれに色々な困難を抱えている。しかし、特に、日本生まれの子どもたちを含む外国ルーツの子どもたちは、複雑な背景から発信力も弱く、保護者も日本語が不自由な場合が多いことから、その本当の困難さが見逃されることがあつてはならないと考える。保護者に対しては、それぞれの文化を尊重しつつ、子どもたちの安全や学力向上のために、学校行事など一つずつ丁寧にその意義を説明し、納得していただかなければならない。

上記④の自立適応期を乗り越えてもなお、年齢とともに困難さも複雑化することから、周囲が見守り続ける必要がある。子どもたちは環境を選べないことから、どこにいても、子どもたちが自分らしく本来の力が発揮できるような支援のシステム構築が必要となる。

4 ICTの活用で困難を軽減

船橋市では、2020年度9月から自動翻訳機の貸与が始まった。導入直後から、ほとんどの子どもたちは、説明書を見ることもなく、カメラ機能や履歴機能を使いこなし、教室でも、授業の理解を深めたり、友達と意見交流を行ったりしている。日本語教室では、母語の異なる子どもたち同士が、「（あなたと）前から話してみたかった」と、自動翻訳機を通じてお互いの母語で話すなどしていた。日本語がわからないという理由で行事を欠席していた保護者も、「自動翻訳機もあるから」と、個人面談等、安心して来校できるようになった。

また、2021年度から一人1台タブレットが導入され、高学年であればインターネットでの翻訳を使いこなせるため、学習内容の理解に大いに役立っている。「一言もわからないのに教室にいたくない」と言っていた子どもも、教室で学習に取り組める時間が増えた。ローマ字入力が苦手な低学年の子どもたちも“VoiceTra”というアプリが搭載されていることから、音声入力で調べ学習ができる。その訳は完璧ではないものの、音声による翻訳や通訳が可能になっている。「タブレットで調べればわかるかも」という安心感により学習意欲も高まっている。ICTの支援により、外国ルーツの子どもたちの学習環境は、大いに改善されることが期待される。

5 おわりに

実際の教室では、上記2で述べたような困難に対しては、子どもたちの在籍学級担任と連携して支援していくことが何より大切となる。外国ルーツの子どもたちが日常の思いや母国のことを伝えるスピーチの発表場面、得意なことで活躍できる場面、道徳などを通じて「言葉の通じないもどかしさ」を周囲の子どもたちに伝えていく場面、お互いの違いを知り相互理解を進めていく場面などの設定により、言葉以外の面でも高い適応状態に至っていくことが期待できる。また、相互理解が進むことで、日本語学習のモチベーション向上にも繋がっていくと思われる。母国の文化の保持は、今の教育システムの枠組みの中では困難ではあるが、保護者の都合により、さまざまな背景をもって来日した子どもたちが、自分のルーツに誇りを持って自分らしく輝き、将来に夢をもって日々を楽しく過ごせるよう、真心こめて支援していきたいと考える。（了）

参考：萩原裕美「日本語指導が必要な外国にルーツをもつ児童の適応のための環境作り ～日本語指導教室と当該児童の在籍学級担任との連携を通して～」(『平成30年度教育実践研究論文集第33号』公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部, 2019)

「子どもの目で見た日本の学校」研究ノート

深谷昌志（東京成徳大学名誉教授）

○教育を見る視点を転換

若い頃、勤務していた奈良教育大学では教育学教室の教員が2年次の学生の必須科目「観察参加」を担当することになっていた。学生を連れて、木曜の1時間目に付属小学校へ行き、授業を見せてもらい、その後、担任の先生とその授業について話し合う実践型の授業だった。前期と後期の各15週、奈良教育大には18年に勤務したので、500回を超える授業を見学した計算になる、もちろん、教育学の教員として、公開授業の講師として招聘されることも多いから、そうした経験を加算すると、参観した授業は1千回を超える。

特に付属小は大正自由教育の伝統を踏まえ、生活教育を土台に、どの授業も完成度の高い授業を展開していた。しかし、見学する内に、こうした授業を子どもがどう感じているか。子どもの声を聞きたくなった。考えてみると、これまでの授業研究では教師の視点が優先され、子どもは学習する存在として位置づいていた。しかし、子どもたちはその子なりに、担任の授業を受け止めている。それだけに、子どもを中心に捉えると、教師とは異なる授業の姿が浮かんでくるのではないか。

半世紀位前まで、子どもは幼く未成熟だから観察対象ではあっても、子どもを聞き取りの対象とする研究は成り立たないと考えられてきた。しかし、子どもと話してる内に、4年生位までの子は感情が移ろいやすいが、5年生になると、どの子も自分の考えをきちんと話せるのに気づいた。そこで、5・6年生を対象として、子どもたちの行動を聞き取る調査を行いたいと思った。研究室の学生に相談すると面白いから参加したいという。そして、聞き取りのテーマとして、「(放課後の)遊び行動」が上がってきた。

そこで、①校区の地図や②前日のテレビ番組 ③聞き取りの際の記入用紙などを用意し、④二人の学生がペアとなって、⑤一人の子に30分くらいかけて、前日の放課後の遊び行動を聞き取ることにした。はじめは付属小や市内の学校に聞き取りの地域が限られていた。その後、学生たちの気持ちももりあがってきて、次の休みにはどこへ聞き取り調査に行くか行き先を検討するようになった。また、その頃、妻も東学大に勤務していたので、学大のゼミの学生も調査旅行に加わるようになり、参加する学生も20名前後になった。その際、交通費は学生の自己負担だが、食費や宿泊費は教員(筆者)負担というルールを作った。また、こうした形で、休みになると、学生とともに各地を訪ね、子どもの遊び行動を調べる生活が続いた。そうした記録は深谷昌志・和子「遊びと勉強」(中公新書・1978年)に詳しい。

○子どもの行動を量的に把握したい

こうした形で子どもの遊び行動を捉えるようになった。しかし、それは、ある地点の特定のクラスのある日の遊び記録で、正確ではあっても、結果を一般化できないのを感じた。そこで、得られた結果をより一般化できるようにアンケート調査の実施を考えることにした。

その頃の教育学会や教育社会学会では高等教育や教育行政の問題に関心が集中し、調査対象も大学生か高校生かに限られていた。しかし、筆者は奈良教育大学に勤務し、学生は付属小学校で実習を行い、近隣の府県の小学校に勤務する。となると、小学生の問題を調査する方が教え子に役立つ研究となる。その頃、若手の教員や院生、ゼミの学生などをメンバーとした私的な研究集団・「子どもの行動学研究会」を作って、月例の研究会を開催していた。その会で、その年度の調査研究のテーマを決め、テーマが決まると、研究同人の先生が子どもから話を聞くと同時に、アンケート調査案をクラスの子に見せ、子どもの意見を聞くのをルールにした。子どもを対象とした調査を1本実施し、それを教育学会や教育社会学会で発表することにした。当時としては小学教師を交えた共同研究の発表は珍しい試みらしく、マスコミの関心を集め、発表成果は新聞紙上に紹介されるのが恒例だった。

そうした折、1980年の春、福武書店(現。ベネッセ)の創設者・福武哲彦社長からお会いしたい

との連絡を受けた。岡山の社長室をお訪ねすると、我々の子どもを対象とした研究をご存知で、社として研究を助成したい。そして、調査結果が得られ、原稿を渡してもらえれば、社として製本し、報告書を全国の小学校に配りたい。夢のようなご提案だった。その後、具体的なツメの作業を行って、①月ごとに報告書を出したいから、可能なら年に12本の調査を行って欲しい。②調査にかかる実費は会社が負担（かかった費用の領収書を渡し、あとで精算）する。③打ち合わせの会場費や食事代は社に負担してもらおうが、研究者ベースで進めたいので、交通費や日当は辞退する。④会社と研究会は研究成果を自由に使用できるが基本的な合意事項だった。

モノグラフは毎号テーマを代える上に、各地の小学校に調査協力を得る必要があるので、福武書店の教育研究所と我々の研究会とが綿密な打ち合わせを行って調査を進めた。そして、1981年6月から2004年3月まで、子どもを対象とした263本の「モノグラフ・小学生ナウ」（調査報告書）を發表することができた。そして、「担任の先生」や「学業成績」、そして「お父さん」「仲良しの子」「お小遣い」「遊び」など多彩なテーマを扱った。しかし、残念ながら、ベネッセが財政的な危機を迎える時期があり、その折、モノグラフ調査も終了することになった。

○歴史研究への回帰

静岡大学を定年退官後、東京成徳学園に招聘され、短大を4大へ改組する仕事に関わった。具体的には全国に先駆けて、従来の保育学部でなく、子どもの成長を支える総合的な学部として「子ども学部」（前年に大阪に成徳とは構造を異にする子ども学部が設置されていたが）を創設した。そして、初年度は全国的な人気を集め、20倍を超える入試倍率で、受験生への対応に忙殺された。しかし、入学した学生は子どもに関心を寄せることなく、保育に関心をもち、保育職への就職を望んだ。その結果、子ども学部は名称にとどまり、保育色の強い学部になっていった。そして、学生は保育に関心を寄せるので、これまでのように学生とともに小学生を対象とした子ども調査を行う状況ではなくなった。そして、研究室に一人だけ取り残される感じになった。

研究者生活を送るようになってから、研究に取り組む姿勢として、ティームを組んでみんなと調査研究を行う一方で、個人としては歴史資料を読む2足草鞋の研究生生活を送ってきた。そして、傘寿の時に退職し、時間だけはたっぷりあるようになった反面、体力も低下し、周りに学生もいなくなり、一人だけ取り残される感じになった。となると、2足草鞋の調査研究を断念し、歴史研究に関心を集中する方が現実的な対応となった。

振り返ってみると、オーバードクターの時期、経済的には苦しかったが、時間だけは豊富にあった。そこで、指導教授の主宰する調査研究に加わりながら、個人としては国会図書館に日参し、明治や大正期の教育雑誌に目を通す生活を送った。国会図書館は保有する資料が豊富で、時間をかければどんな資料でも閲覧が可能だった。そうした閲覧した明治や大正期の雑誌資料が博士論文・「良妻賢母主義の教育」（黎明書房、昭和41年）の土台となった。そうしたオーバードクターの時期を思い出し、子どもを対象とした歴史研究なら一人でもできると思い、資料を読むことにした。

○自伝を手掛かりに昔の子どもの心情を捉える

考えてみると、教育学には教育史というジャンルがあり、優れた研究も蓄積されている。しかし、そこではいかに教えるかに関心が集中し、子どもサイドからの視点は欠落している。優れた先行研究も、教師の教える視点が優先し、子どもは学習者として位置付けるのが常だった。端的にいうなら、「教育史」はあっても「学習史」は皆無だった。それだけに、教育史研究の中で、子どもをどう教えたのかという資料は豊富にある。しかし、子どもがそうした教えをどう感じたかという子どもを視点とした考察はほとんど試みられていない。それでも、現在の話なら、子どもの気持ちを尋ねることが可能だ。しかし、大正や昭和の子がどう感じたのかはその方が存命ならば子ども時代の思い出をお聞きすることができる。しかし、多くは他界され、今となると調べる方法を見出しにくい。そこで、昔の子どもの声を聞く便法として自伝に着目した。自伝には、それぞれの人の子ども時代が描かれている場合が多いので、そこに着目し、それぞれの人の子ども時代を復元することにした。

実をいうと、筆者は「学歴主義の系譜」（黎明書房、昭和44年）を執筆する際、単なる学校制度論ではなく、子どもたちが学歴取得をどう考えていたかを子どもサイドから学歴をとらえたいと思った。具体的には自伝を通して学歴取得の状況を知りたいと考え、自伝の収集に努めた。もっとも、

政治家や財界人の自伝は記者がまとめたものが多い上に、記述に装飾が加えられている事例も見られるので、市井の徒を中心に自伝を収集した。その後も何となく、目につく自伝を求めてきたので、家には300冊を超える自伝があった。しかし、その時は子どもが学歴取得をどう考えたのかに関心があり、その部分を切り取る感じで資料を読み取っていた。そこで、あらためて、それぞれの人がどういう状況下で子ども時代を過ごしたのか、子どもの育ちを子どもの心に戻す感じで復元しようと考えた。

○「気が重くなる」学校から「通いたい」学校へ

明治から昭和まで、多くの子にとって、学校は通いたい場だった。学校へ行けない子の多い中で、日々の家事や農業などの手伝いから解放されて、学校内で先生から勉強を習うだけでなく、友だちと楽しく時間を過ごせる。そして、卒業すれば基礎的な読み書き算を身につけ、社会で一人前に働くことができる。それだけに、学校へ行けない子は羨ましい気持ちで、通学する友の姿を見つめていたといわれる。

もっとも、昭和10年代でも中等教育への進学者は1割以下にとどまり、6年制の小学校を卒業できれば幸せの時代だった。それに対し、現在では20代の若者の8割が学校に籍を置くといわれる。それにしても、小学校を卒業できれば幸せだった時代の雰囲気は現在の小学校に残っている。具体例をあげるなら、伝達型の授業スタイルが小・中・高・大（専門）と12年間以上も続く。そうすると、学校は「通いたい場」から「気が重くなる場」に変質してくる。

欧米ではのんびりとした小学生と自分の進路を真剣に模索する高校生のように、学校段階により発達課題に添った学校段階ごとの教育の姿が見られる。それだけに、日本の場合も、小学生の内はもっと自由に過ごさせる半面、高校生はより真剣に自分の進路と向かいあって欲しいと思う。

○子どもが自由に動き回れる小学校作りを

比較教育学を学べば常識的に分かることだが、日本のように、文部省が小学1年生の教材を全国的に指定するのはソ連や中国のような社会主義国家に限られている。その結果、地理や歴史を例にとれば、同じような内容の学習を国レベルで画一的に小・中・高と3回繰り返すことになる。そうすると、学習がマンネリ化し、学習する喜びが失われる。

欧米の小学校を訪ねると、教科は国語と算数にとどめ、他の時間は合科教授的な体験学習に多くの時間を費やす姿を見かける。そうした中で、各学校の自主性が尊重され、教員の個性が発揮される。そして、子どもは自分の関心を大事にしながら、体験学習を重ねる日々を過ごす。それが、先進国の初等教育の姿であろう。

日本の子どもにしても、少なくとも、小中高の12年間は学校を通して学習を重ねていく。そうだとしたら、小学低学年では読み書きの学習を別にして、残りの時間は子どもの自主的な学習に任せていいのではないか。というと簡単なようだが、子どもが自分なりの関心に従って、それぞれの学習活動を行う。そうした個人差を認め、担任は子どもを指導していく。となると、子どもの数だけ学習が展開されるから、担任の負担は一斉授業よりはるかに増す。しかし、手間暇のかかる教育が小学校本来の姿であろう。知識取得的な学習は小学高学年から中高に任せ、小学3・4年生までは子ども自身の自主学習を大幅に認めてはどうか。そうすれば、子どもたちが小学校に抱く「気の重さ」は薄れるだけでなく、自分から学びたい場に学校が変わってくる。教師からすると、子どもの自主性を認める分、手間暇はかかるが、子どもは自由に動き回っている。それが小学校教育の目指す理想の姿のように思う。

雑稿

樋口雅子 ([学芸みらい社](#))

天井まで飛んでいくシュークリームの“シュー”
～話を盛ってビックリさせてた上級生の話～

「今日は、お蕎麦だった」
敵機偵察隊と称する6年男子が、引率教師の部屋を覗いて報告する。
学童疎開先、富山のお寺の一コマ風景です。
3年～6年まで、200人は超えていたであろう。
学童たちは、みな空腹。先生も敵にみえた？
東京を出る時、最年少の3年だった私は、甘いものなど沢山持たされ、まるで遠足気分～。
が、一夜明けると広いお寺の中で、親もいない現実がガンと迫ってきた…。
誰かが、ワーンと泣きだすと全員大合唱。
もう涙も枯れ果てた時、子供心にも、現実を受け止めるしかないことを全員悟った…。
お寺での生活は、病気になった友だちが食べ残した蜜柑の皮欲しさにお見舞いに行ったことや、「食べても減らないものがある」という類の話を上級生に何回も聞きにいった、というような空腹にまつわる記憶が鮮明。
疎開のおかげで、B29など、アメリカ機を見たこともないーと自慢して来ました。
これが私の戦争体験ということになるかなあ。
今年の8月15日朝刊に、「戦後76年 刻む つなぐ」という連載に学童疎開の特集があり、「13都市40万人、地方7000か所へ」という一大事業だったことを知りました。
東京から遠く青森岩手にもいっていたこと。長野が一番多くを受け入れていて36975人。
富山は6257名。
だったそうです。

自己紹介

○植村和彦 ([九州産業大学 人間科学部子ども教育学科](#))

九州産業大学人間科学部子ども教育学科講師の植村和彦と申します。福岡市内および北九州市内の保育者養成短期大学にて計11年間勤務後、平成30年度より現職です。5歳の頃にピアノという楽器と出会い、レッスンの受講を開始しました。中学校時代に合唱や弦楽器との共演の機会を得てからは、室内楽や伴奏の分野に惹かれ始めました。高校時代に出会った師匠の助言から福岡教育大学に進学しました。在学中より、管楽器や弦楽器、声楽を専攻する同期や先輩・後輩との共演、あるいは社会人合唱団との共演等の機会を広く求め、学外での演奏活動に積極的に取り組んできました。

保育者養成校の教員となってからも、可能な限りこうした活動を継続したいとの思いで歩んでおります。特に保育園や幼稚園、小中学校や高等学校、特別支援学校等を訪問するアウトリーチ活動において、音楽の演奏やその共有体験を通じて、多くの子どもたちや先生方と交流してきた体験は、常に大きな心の支えとなっています。このような経験から学び、感じたことを少しでも学生に伝えていけたらと思います。

先生方から多くのことを学ばせて頂きたいと考えております。未熟ですが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

近況報告

榎本太麻子（声楽家・東京成徳大学講師）

皆さまもこの終わりの見えないコロナの状況に、さぞや落ち着かない毎日を送られていらっしゃるでしょう。

私は、すっかり演奏会本番のない日々を過ごしております。そのかわりに、授業が今学期もほとんどがオンライン授業になり、私は、授業の前は少しは慣れたものの心配でドキドキします。

また、自宅に来る幼稚園や小中高生も、緊急事態宣言中は、オンラインレッスンです。小さい子どもたちの生活は、もうすっかり、お友だちの家への行き来は無くなり、「毎日できるだけ自宅の中で遊ぶ」という状況が当たり前のようになっていきます。

私のもう一つの出勤先である東宝芸能の研修所の授業では、大きなビニールの衝立を使い、何とか対面授業をしておりますが、マスクはしたままの歌のレッスンです。正直申し上げて、全く成立するものではありません。今のこの状況は、音楽実技を勉強しようとする若者にとって、非常に気の毒な状況です。

またその研修所を運営する東宝芸能は、『レ・ミゼラブル』『ミス・サイゴン』『ラマンチャの男』『マイフェアレディ』等を筆頭に、数多くの作品を手掛けている会社ですが、このようなコロナ事態の中、役者の組み合わせグループをいくつも作って、だれか一人コロナ感染しても開演が続けられるように、しょっちゅうグループ変えをして準備しながら開演しています。つい先日、『レ・ミゼラブル』は、2か月にも及ぶ東京公演を終え、出演者、スタッフ共に、福岡公演に向かったところです。

少しでも早くこの状況から脱して、子ども達が皆で集まって賑やかに楽しんでいる様子を見たい！私ども音楽家も自由に演奏できますように！と願ってやみません。

谷口ひろみ（公認心理師）

「おはよう。〇〇ちゃん、今日は谷口先生と一緒に積み木をして遊ぼうか」と2歳過ぎの男の子に声をかけます。〇〇ちゃんは、まだ言葉が出ません。今日は、1歳8ヶ月健診のスクリーニングの後の発達相談。1歳半の発達の節をしっかりと超えているか、新版K式発達検査を実施します。その後、保護者の方と結果をお伝えしながら、発達や子育てに関わる相談を行います。宇治市役所で毎週水曜日に発達相談員として働いています。

また、他の曜日には、毎月京都府北部の綾部市の小規模小学校3校をそれぞれ訪問し、児童観察、保護者相談、先生とのコンサルテーション、教育相談部会や校内委員会への出席、夏季研修など、スクールカウンセラー（SC）として勤務しています。自己研鑽のための研修は、もっぱらズームやオンラインで行い、各学校とのやり取りは、メールが主な手段です。

一昨年に京都府の教員を定年退職した後、在職中に取得した公認心理師の資格を生かしたいと考えました。この2つの仕事は、フィールドは異なるのですが、ひとつの連続体として深い繋がりが感じています。例えば、小学校で児童の課題に当たるとき、その根っこには、乳幼児期の発達課題にたどりつくということです。特にSCとして、学校から相談される内容については、愛着に関わる根深い課題が多いように感じます。

この二つの仕事は、自分なりの働き方改革でもありますが、新しい世界の仕事でもあります。長年教師として勤務し、学校のことが分かっている自分だからこそ、できることは何だろうか日々模索しながら仕事に取り組んでいます。

句会 むさしの

○月山の響く錫杖蕎麦の花

安田 勝彦

涼新た民の勝訴の「黒い雨」

笛吹きし友も老いたり秋祭

秋（8月7日）の頃は、まだ炎暑の毎日ですが、古来「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」藤原敏行（古今集）と歌われているように秋の気配忍び寄る頃でもあります。一句目は、山形県月山の修験者の錫杖の音が涼風に乗って聞こえてくるようです。「黒い雨」裁判は、政府が上告を断念しました。広島のみなさまの永い間のご苦勞が偲ばれます。そして8月15日、平和を考える終戦記念日となります。夏から秋への移り変わり、この微妙な季節感を日本人は大切にしております。

○荒畑の剛毅な草の穂波かな

市原 潤

野に還る畑のなかに水流る

土地はさまざまな堆積物で毎年1ミリずつ高くなっている、と考古学の専門家に聞いたことがあります。空間が異なれば時間も異なることへの配慮も必要。

○ワクチンを享^うけ今少し働^はかむ

上島 博

メダルより佳^よきもののため娘^こら舞へり

議論百出のワクチン政策であるが、何はともあれ2回の接種をしていただいた。幸い重い副反応もなく、2週間が過ぎた。人々の叡知と莫大な費用が注ぎ込まれたワクチンを無料で受けることができた。しかも高齢者なので優先的に。世界を見ると、治療もワクチンもままならぬ地域の方が多いただろう。延命してもらった命、もう少し社会のために役立てたいものだ。

これも議論百出のオリンピック。しかし、始まってしまえば、成功を祈るしかない。選手をはじめ、多くの関係者が築き上げたものだ。手に汗握るたたかいが多い中、とても爽やかだったが、スケートボードである。どうして、こんなに楽しそうに滑るのだろうか。もちろん勝つために全力を尽くしてはいるのだが、それだけではない。「かっこよく滑りたい」と彼女たちは言う。高難度の技に挑戦して失敗した子に、国関係なく駆け寄って、なぐさめ、担ぎ上げて健闘をたたえる姿。見終わった後、何ともいえないすがすがしさに満たされた。

編集後記

反対の声が収まらなかったオリンピックも終わり、パラリンピックが始まりました。危惧されていたように、コロナの感染拡大の勢いは止まるところを知りません。経済活動への影響以上に、誰もが子どもの成長環境から「ひと」や「友だち」が乏しくなることを憂慮しています。でもこの「風の便り」のステージには、いつも変わらぬ豊かな学びも、遊び、人との触れ合いも豊かです。皆さまの大きなお力をありがたく思います。今後も引き続き、ご愛読のほどをお願い申し上げます。

(深谷和子：kazukofukaya@nifty.com)

〈編集委員〉

深谷和子（長）・湯浅俊夫・上島博・清文枝・土田雄一・大高志芳・吉野真弓・細江久美子

〈「風の便り」 2021年9月号目次〉

今月の滝	白糸の滝	細江久美子
今月の詩	「おうち」新川和江	ゆあさとしお
実践報告	外国ルーツの子どもたちの困難	萩原裕美
子ども研究ノート	「子どもの目で見た日本の学校」研究ノート	深谷昌志
会員談話室		
雑稿	天井まで飛んでいくシュークリームの“シュー”	樋口雅子
自己紹介		植村和彦
近況報告		榎本太麻子、谷口ひろみ
句会	むさしの	安田勝彦、市原潤、上島博
		編集後記 (深谷和子)